

三月という季節は想い出のように
暖味あいまい

雨露
山鳥

「あ、ウグイス」

三月の初め。腰の重かった冬の背後からようやく春を告げる鳴き声を聞いたとき、私はアキ君の組み立てた段ボールに文庫本を詰め込んでいた。

「え、ほんと？」

訝いぶかるような表情のアキ君は使い終わったノートを縛る手を止めて、目を瞑つむって耳を澄ませている。数十秒は粘ったけれど、窓の向こうにはまだ硬い桜のつぼみが枝に揺れるくらいで、結局ウグイスがその囀さえずりを聞かせてくることはなかった。

——約一ヶ月前。二月十四日、バレンタインデー。あの日を境に、私たちシェアハウスのメンバーの関係性は大きく変化した。私も含めてカップルが二組も誕生したのだから、当然と言えば当然だ。

「さっき聞こえなかった？ 窓の外から、ホーホケキョって。……『ホーホケキョ』ってウグイスだよね？」

「それは、合ってるけど……」

その日以来、アキ君は徐々に私に対しても敬語を使わずに喋る努力をしているみたいだった。タメ口に慣れきれていない感じが、背伸びをしているようで微笑ましい。

「……うーん、でもやっぱり僕には聞こえませ——聞こえなかったけどなあ」

アキ君はふっとため息をついて、教科書の整理に戻った。

私が告白されたのと同じ日に聞いたのだけれど、アキ君は不仲だったご両親——特に義理のお母さんとも仲直りができたようで、来月からご両親と一緒に暮らすことになるという。私がいまアキ君の部屋で段ボールに彼の荷物を詰め込んでいるのは、その引越し準備のお手伝いというわけだ。ここにいない二人はバイトや買い出しに部屋を空けているから、手伝っているのは私だけ。タイヨウ君はもしかしたら、新しい家で必要になるアイテムを見に行っているのかもしれない。

アキ君は両親との仲直り。タイヨウ君は第一志望のラジオ局に就職。それらはもちろん歓迎すべきことなのだけれど、それでもちよつとだけ寂しく感じてしまうのは、恋人と一緒に暮らせる期間が一ヶ月もないということよりもむしろ、私がこの四人での暮らしに慣れすぎてしまっているからなんだろう。

来月、アキ君とタイヨウ君はこのシェアハウスを出て行く。それは、どうあっても変わらないことだ。

「ん？ これって——」

私が文庫本を出し終わった棚の奥から見つけたのは、金属製のネックレスのようなものだった。大小2つの金属製のハートがチェーンで結ばれている。けれどネックレスにしてはチェーンが短すぎる気もする。

「ああ、そんなところにあっただ」アキ君はどこかほっとしたように。「この前のパー

ティーのあとから、どこにいったか解んなくなつてたんだ

「ハートが二枚あるけど、これってアクセサリ？」

「ううん、知恵の輪です。キャストハートって名前の」

「知恵の輪？　これが？」

驚いてまじまじと見つめるけど、とてもそうは見えない。私知知っている知恵の輪は銀色の太い針金をくねくねと巻いたようなものだ。比べてこれはハートに装飾も施されて、インテリアとして飾られていても違和感は覚えないうらう。

「そう。貸して」

手を伸ばすアキ君に、私は持っていたそれを差し出す。

「金色のハートにチェーンで縫い止められてる、この銀色のハートを外すんです」うっかり敬語に戻ってしまったアキ君が、十数秒の間チェーンをいじっていると。「ほら、外れた」

「えっ、すごい！」

「それで、これをこうやると……ほら」

「えっえっ？」

まるで手品のように、またもとの形に戻ったその知恵の輪を、私はアキ君から受け取った。アキ君の手のひらでほんのり温まったチェーンをいろいろいじってはみるけれど、さ

つきアキ君がこのパズルを解くまさにその瞬間を見ていたはずなのに、銀色のハートは一向に外れる気配を見せない。

「チェーン系のパズルとしては結構初歩的なので、そういう種類のパズルに触れたことがあればひねりなく解けるんですけど、初見だと確かに難しいかもですね」

「う〜〜〜」

「……でも、前のパーティーの時には見せてたはずなんです——だけどなあ」と、タメ口で話すことを思い出したアキ君。「ほら、僕とカナさん、タイヨウ兄と仁愛にあさんが同時にカップル成立だって言って、僕やタイヨウ兄の送別会も兼ねて二月末にお祝いパーティーしたよね。そのときには、みんなに見せたはず。だってタイヨウ兄がこのパズルするする解いてたの、憶えてるし」

「……………」

ここまで綺麗さっぱり記憶が無くなってることとは、その日相当飲んじゃったんだろうなあ……。私、飲み過ぎると記憶がトブタイプだし。

「しばらく貸すよ」アキ君は苦笑して。「いい時間つぶしになると思う」

「——ありがと、頑張ってみる！」

完璧になにも憶えていないのはさすがに申し訳なくて、せめてなにかそのときの様子を映した写真でも残っていないかと、スマホの写真フォルダで、自分の撮った写真をさかのぼっ

てみる。スマホは告白されたのを機に、iPhoneに機種変した。デジタルに弱い私に代わって、タイヨウ君が選んでくれたものだった。いままですとAndroidユーザーだったこともあって、いまだに使いこなせている気がしない。iPhone使用の他の三人にいろいろ教えてもらいながら勉強中だ。

「ん？」

その写真は、フォルダの中に突然現れた。

アキ君が、カメラに向かって微笑んでいる写真だった。背景はイルミネーションに煌めく遊園地だ。その前後は映えるカフェで撮ったパフェやパンケーキの写真で、私以外の人間がほとんど写っていない中に、一枚だけアキ君の写真が紛れ込んでいるのは違和感があつた。

私の疑問を敏感に感じ取ったらしい。アキ君が私のスマホを覗き込む。

「ああ、これ。よみうりランドのイルミネーションの」

「……え？」

「ほら、憶えてない？ 僕がカナさんに告白した次の週に、僕とカナさんでよみうりランドに行ったの」

「え？ えっ？」

ちよつと待って、待ってほしい。

「そのときの写真だよ」

私はアキ君とよみうりランドに行つたことなんてない。

だからそもそも私がこの写真を撮れるはずがない。でも、だとしたら私の写真フォルダに残つてるこの写真は、いったい……？

「えっ、待つて、ちょっと待つて」頭の中がぐるぐるしている。「この写真つて、私が撮つた写真!？」

「カナさんが撮つた写真だよ」なぜそんなことを訊くのか不思議だ、とても言いたげな口調だった。そして私は、なぜアキ君がそんなに冷静なのか解らない。アキ君の答えのせいで余計に頭が混乱してきた。

「……え」髪の毛をかきあげながら私。「じゃあなんでこの写真がスマホにあるの？」

「というか、なんで——」と口を開きかけて、アキ君ははっとした表情になつた。「……なるほど、そういうことか」

「え？」

アキ君は一瞬、何かを考え込むように俯いて、そして顔を上げて私を見た。

「多分だけど、タイヨウ兄に訊けば解ると思うよ」

「なんで？」マズい、どんどん頭がぐるぐるしてきた……。アキ君には、なんで私が撮ったはずのない写真が私の写真フォルダの中に残っていたのか、その真相が見えてるのかな？　つていうか、なんでここでタイヨウ君の名前が出てくるんだろう？　「タイヨウ君はなんでこんなことが起こってるか解るの？」

「うん」アキ君は自信満々に頷いた。「タイヨウ兄たちが帰ってくるまで、少し考えてみてよ。僕からの謎解き問題、つてことで」

どうやらはつきりと答えが解っているらしいアキ君は、私を見てはにかむように笑った。

* * *

アキ君の荷物の整理が一段落ついて、私は二階の自室に戻っていた。私の作業はずっと上の空で、けれどアキ君も淡々と作業をしていたから、結局二人で黙々と荷物を纏めていただけだった。十七時を過ぎてもまだ鮮やかな水色を残している空に、春が来たことを実感する。けれど暖房をつけていない部屋は、カーデイガン一枚では少し心許ない。冬と春とが混じり合う、三月という季節はどこか曖昧だ。

ベッドに腰掛けて、毛布を肩から羽織った。まだ外が明るいので電気はつけない。いまいちどスマホの中のアキ君の写真と向かい合う。赤や青の煌びやかなイルミネーションを

背景に、ちよつと逆光気味のアキ君がカメラの方を振り向くその瞬間を切り取った写真。

——私が撮れたはずのない写真。

私はそのまま崩れるように、ベッドに倒れ込む。

アキ君から出題された謎を考えようと写真フォルダを開いたはずなのに、気づけばフォルダのなかの写真をスクロールしていた。夜の公園、自撮り、ふと見上げて綺麗だった空、海鮮丼、お台場のチームラボ、パンケーキ、パフェを食べようとしている私、スカイツリー、エトセトラエトセトラ。私の撮る写真には、驚くほど他人が写っていない。

「……………」

思い出の瘡蓋かさねたを剥がしてしまったことを後悔しながら、私はスマホをスリープさせた。

ごろんと寝返りを打つ。ふと腰元に違和感を覚えて、デニムのポケットをまさぐった。

「……ああ」

出てきたのはなんてことない、さつきアキ君に借りたハートの形をした知恵の輪だった。金色のハートにチェーンで結びつけられた銀色のハートを外すんだっけ。ベッドに横向きのまま、チェーンをいじってみる。チェーンは思っているよりも複雑に絡んでいて、どうやって外せばいいのか皆目見当もつかなかった。

ひらめき次第で一瞬で解ける謎解きは好きだけど、ルールに基づいてじっくり考えなきゃいけないパズルは苦手だ。じっくり考えるのが嫌になるから、そしてじっくり考えるこ

とができない自分が惨めになるから。

私は早々に解くのを諦めてしまつて、ただ手慰みに銀色のハートとチェーンをいじっていた。もう考える気分にもなれないから、謎の答えについては、アキ君の言う通りあとでタイヨウ君にでも訊くことにしよう。

「……………」

……別に、昔からずっとスマホで他人の写真を撮つてなかつたわけじゃない。昔はむしろ、付き合っていた彼氏とのデートでの出来事や、高校時代の友人たちとの思い出は、たくさん写真に残していたほうだと思う。輝く宝石を宝箱の中に溢れさせるように、ことあるごとにスマホのカメラを起動させていた。

……そうしなくなつたのは、そうやって宝箱に押し込めた誰かとの思い出が、色褪せた後も残り続ける空しさに気づいてしまったからだ。初恋だった彼氏には二股をかけられていた。親友だと思っていた高一の時の友人は、翌年私をいじめる側に回つた。季節が私の頭の上を通り過ぎて行くみたいに、私の周りの人間関係はどうしようもなく移ろっていくのに、画像フォルダの中でだけは何も変わらずにその当時の生ぬるい笑顔が残り続けている。そのやるせなさ、自己嫌悪に苛さいなまれて、私は写真フォルダの画像を全部消した。それ以来、私のフォルダに私以外の誰かの写真が残つたことはない。

「あ」

ふと持ち上げた銀色のハートが、チェーンから外れていた。チェーンをいじっているうちに、いつの間にか解けてしまっていたらしい。何も考えずに、指のおもむ赴くままにチェーンを引っ張ったりいじったりしていたものだから、当然元に戻す方法なんて解るわけがなくて。そもそも、もとはどんな風に銀色のハートにチェーンが通っていたかすら、あやふやだ。

……もしも私が、パズルが好きだったら。こういうパズルをしつかり考えて解くことができるような性格だったら。

私のスマホの写真フォルダは、もつといろんなひとの笑顔で溢れていたのかな。

私は頭が良くないから、過去になってしまったひとたちの写真を全部消すっていう方法でしか、セピア色の想い出を精算できなかつたけど。もしかして、そんなことをしなくても済むような考え方に、巡り会うことができているのかな。

「はあああああ」

肺の中の空気を全部出し切ってしまうようなため息が漏れた。思考が鬱々としてしまうと、まるで螺旋らせんを降りて行くみたいに自己嫌悪を掘り下げてしまう。良くないって解っているのに——むしろだからこそ、この感情のネガティブスパイラルからは抜け出せない。

胸の奥に、じくじくと腐っていくような鈍い痛みを感じた。

仰向けになって、天井を見上げた。自分の身体がベッドに沈み込んでいくみたいに重く

感じた。いつの間にか空は茜色のグラデーションがかかっている、部屋の中も薄暗くなってきた。

手に持っている銀色のハートを持ち上げる。天井にかざすように、腕を伸ばしてみる。ハートの中に写りこんだ私の顔は、みっともなく歪んでいた。

* * *

「ただいま」

玄関ドアが開いた音に、はっと目を覚ますと空はもう暗くなっていて、うつすらと星が瞬き始めている。いつのまにか眠り込んでいたらしい。

いつもなら「お帰り」と玄関に向かうのだけれど、どうにも身体が動かなかった。すぐにでも誰かと話したいという気持ちは頭の中に膨らんでいくのに、身体がいうことを聞いてくれない。

スマホをつけて時間を確認すれば十八時を回っていた。ロック画面の青い光がぼんやりと私の枕元を照らす。

タイヨウ君のことだから、またいろいろと食材を買い込んだのだろう。冷蔵庫を開け閉めする音が間欠的に聞こえてくる。上手く聞き取れないけど、部屋から出てきたアキ君と

なにかを喋っているみたいだった。

起き上がる気持ちにはなれなくて、手持ち無沙汰にインスタでも開こうとロックを解除すると、真っ先にアキ君の写真が出てきた。そっか、私、もともとはアキ君からのこの問題を考えてたんだっけ。それで、気づいたらこんな鬱々とした気分……。

ベッドに寝転がったまま、その謎のアキ君の写真を見つめていると、ふと誰かが階段を上ってくる足音が聞こえた。一步一步に体重が乗るような上りかたをするのは、タイヨウ君だ。なんとなくだけれど、私に用がある気がした。

メンタルポロポロな今の状態をさすがに見せたくはなくて、ゆるゆると起き上がる。じきに、こんこんこん、と私の部屋のドアがノックされて。

私がドアを開けると、案の定そこにはタイヨウ君がいた。

こんなにすぐドアが開かれるとは思っていなかったのか、タイヨウ君は少し驚いたような表情で、

「ごめん、寝てた？」

「ううん、電気つけずにベッドの上でごろごろしてただけ」私は部屋の明かりをつけた。

「なんかアキが、『様子を見てきてくれ』って」

なるほど、さっきアキ君が喋っていたのはこれか。もしかすると荷物整理のときにずっ

と上の空だった私に、アキ君が彼なりに気を遣ってくれたのかもしれない。

「……だとすれば、その気遣いはすごくありがたかった。

「……大丈夫？　なんか、疲れてるみたいだけど。アキの引越しの準備、そんなに大変だった？」

「ううん、そういうんじゃない……」

タイヨウ君をずっと廊下に立たせているのも気が引けたので、ちょっと待って、と部屋の中を簡単に片付けてから、タイヨウ君を部屋の中に招き入れた。お邪魔します、と小さく呟いて、タイヨウ君はカーベットのの上に胡座あぐらをかく。私がベッドに腰掛けるのを待って、何でもないことを装うように、私が外してしまつた知恵の輪をいじりながら口を開く。

「それで？　何かあった？」

「……………」

自分がさっきまでうじうじしていた内容を知られるのがなんとなく嫌で、私はお茶を濁した。

「……まあ、ちょっと」

見上げるようなタイヨウ君の視線を正面から受け止めるのが怖くて——私の内側にある黒くてどろどろとしたものをすべて見破られてしまいそうで、私は視線を逸らした。普段は気にならないはずの沈黙が、今だけはやけに居心地が悪かった。何か話したいという

気分だけが空回って、普段はすぐに見つかるとは思はずの会話の糸口もなかなか見つからない。
「……ああ、その写真」

沈黙を破るようにタイヨウ君が視線を向けたのは、つきっぱなしだった私のスマホだった。瞬間、アキ君が「解らなかつたらタイヨウ兄に訊いて」と言っていたことを思い出す。
「あ、うん、これ何か解る？」

「何かって？」

私がおかしいことになってきたことに面食らったように、タイヨウ君は驚いた声で。

「カナちゃんが撮った写真でしょ？」

「ううん、違って」と私。「撮ったはずのない写真が、なんでこのスマホにあるのかが解らないの」

「あれ、前言わなかったっけ？」とタイヨウ君。「AirDropだよ」

「えあどろっぷ？」

「そ。iPhoneの機能だね。自分の撮った写真を、面倒な接続設定とかをしなくても、簡単に相手に共有できるんだ。この写真も、バレンタインの何日か後にやったプチパーティーのときに……って、そっか」

ふと、タイヨウ君が得心のいったように頷いた。

「あのパーティーのとき、にゃーちゃんはべろんべろんに酔っ払ってたんだっけ」

「うう……」

——なるほど。やっと解った。

つまりこのアキ君の写真は本当にカナが撮った写真で、それをAirDropというiPhoneの機能でカナが私に渡したんだ。けれど私はそのときべろんべろんに酔ってたから、そのことを綺麗さっぱり忘れていた。機種変したてでデジタルにも疎い私はその機能を知らなかったから、私にとって不可思議な写真になってしまったってわけだ。

「せっかくみんなiPhoneになったんだし、ってことでみんなの好きな写真をAirDropを使って送りあったんだよ。にゃーちゃんがAirDropに目をキラキラさせてたから、せっかくなら面白いことに使ってみよう、ってさ」

お、できた、なんて言いながら、タイヨウ君は元の状態に戻った知恵の輪を机の上に置いた。

「みんなでせーので送りあったんだよ。確か俺が送ったのはこのパフェの写真で、アキが送ってきたのがこの公園の写真かな？ そんななかでカナちゃんがアキの写真を送ってくるもんだから、みんなで大笑しちやっつて。惚気のろけすぎだ〜ってさ」

「……………全部理解した」

「だからお酒は飲み過ぎないほうがいいよ、って言ったのに」
タイヨウ君はからかうようにからからと笑った。顔がみるみる熱くなっていくのを感じる。

「言い訳のしようもないにゃ……」

——うう、穴があったら入りたい。

「そもそも『みんなの好きな写真を送ってほしい』って言ってたのにもにゃーちゃんんだよ」とタイヨウ君。「まさか、そこまで含めて全部忘れちゃうとは……」

「も、もうっ！ 解ったってば！」

「あはは、ごめんごめん」

きつと今の私のほっぺたはリングゴみたいに真っ赤だろう。確かに酔っている私なら、そんなことを言い出しそうだ。

改めて写真フォルダを見る。言われてみればなんてことない、——むしろ私が酔っていただけっていうなんとも情けない答えだったのか……。ああ、アキ君に訊き返したこと自体が恥ずかしい。

……けれど、茹^ゆだった頭が冷えていくにつれて、どうしても気になることが出てきた。

「……ねえ、じゃあさ」

「ん？」

「そのときの仁愛、みんなにどんな写真送ったの？」

私がい出しっぺなんだし、私だけ写真を送らなかつたなんてことは考えづらい。けれど記憶がトンドるせいで、何を送ったのかさっぱり思い出せない。

「フォルダの中じゃない？」

「どれか解んなくて」

「あー、えーつとね」タイヨウ君はポケットから自分のスマホを取り出すと、画像フォルダを開いた。しばらくスクロールをすると、「ああ、これ」

「……………」

目を瞠みはった。

タイヨウ君が見せてくれたのは、私たち四人が写った写真だった。シェアハウスのリビングで、グラスを片手にめいめいが好きな方向を向いている中で、私だけがカメラ目線をバッチリ決めている。

「この写真、あの日のパーティーの時の写真らしくてね、にゃーちゃんがいつのまにか隠し撮りしてたんだよ」

仁愛ね、タイヨウ君のことが大好きだけど、親友のカナのことも、弟みたいなアキ君のことも大好きなの。

酔って頬を赤らめた私が、まるで自慢するみたいなふにやけた笑顔で、スマホ越しに私

のことは見つめている。写真の中で、カナは何かがつぼに入ったのか大笑いしていて、それで倒れそうになったハイボールのグラスをアキ君が慌てて押さえている。キツチンのほうからはエプロン姿のタイヨウ君が、ナポリタンの載ったお皿を片手に歩いてくる。そんな何気ない、ふとすれば忘れてしまいうる日常の一コマを切り取ったその写真が私は好きだ。もうじき終わってしまう、この四人での暮らしが大好きだ。

——なのに。

言いやうのない悔しさが胸の奥から湧き上がってきて、視界がみるみる滲んでくる。

「……なんで、消しちゃったかなあ」

「にゃーちゃん？」

タイヨウ君に、いまの私の情けない顔を見られたくなくて俯うつむいた。

私のスマホの写真フォルダに、その写真は残っていない。理由は解りきっている。私以外の誰かの写真が残るのを嫌がった私が、きっとみんなに送ってすぐに消したんだ。

いっつも誰かと一緒にいないと耐えられないくせに、淋しきで死んじやいそうになっちゃうくせに、その誰かが私の深いところにまで潜り込んでこようとすると拒絶してしまう。誰かとのつながりを常に求めているくせに、いざそれが薄まってしまったら完璧に消し去りたいと思ってしまう。私はネコみたいに自由気ままに生きているわけじゃない。ほんとうはウサギみたいに臆病なだけだ。

悔しかった。

こんな悔しさは二度と味わいたくないと思った。
変わりたいと思った。

アキ君が敬語を辞めたように。

季節が、移り変わっていくように。

ちよつとでいい。

この曖昧な三月から抜け出せるような、一歩を踏み出せるなら。

だから、私は、

「——ねえ、タイヨウ君」

「うん？」

袖でそでごしごしと涙を拭ってから、私は顔を上げた。泣き笑いの笑顔を浮かべて、スマホを持ち上げる。

「一緒に、写真撮らない？」